

吉備国際大学
国際環境経営学部研究紀要
第19号, 37-46, 2009

環境配慮行動および社会活動の実践と子どもの頃との関連 —岡山県の大学生を対象とした質問紙調査—

宮川 雅充*¹, 井勝 久喜*¹, 諸岡 浩子*², 廣田 陽子*³, 土生 真弘*³, 青山 勳*³

Relationship between environmentally conscious behavior, social activity, and childhood conditions
— A questionnaire study of university students in Okayama Prefecture, Japan —

M. Miyakawa*¹, H. Ikatsu*¹, H. Morooka*², Y. Hirota*³, M. Habu*³, I. Aoyama*³

キーワード：環境配慮行動, 社会活動, 子どもの頃, 家庭環境, 自然体験, 環境教育

1. はじめに

環境基本法では、基本理念として、「環境への負荷の少ない持続的発展が可能な社会の構築」が掲げられている。この例が示すように、近年では、環境問題と関連して、「持続可能性」というキーワードが注目されている。

また、持続可能な開発のための教育（ESD：Education for Sustainable Development）の必要性も指摘されている。2005年から始まった「国連ESDの10年」では、自然との共生や多様な立場を尊重できる価値観を持ち、問題解決能力に富んだ人の存在が重要とされており、そのような人を育てるための教育を推進していく必要があるとされている（NPO法人 持続可能な開発のための10年推進会議, 2006）。

持続可能な社会の実現を考えたとき、問題解決のための行動の例としては、以下のようなものが考えられる¹。

- 個人として環境配慮行動（環境に対する負荷が相対的に小さい行動）を実践すること

- 社会に対して積極的に関わり活動すること（社会活動）

環境配慮行動や社会活動の実践の関連要因（規定因）を調べることは、ESD（「環境教育」を含む）のあり方を考えるうえで有用と考えられる。特に、従来の研究結果（Tanner 1980, 田尻・井村 1994, Tanner 1998, Chawla 1998, 比屋根・畑中 2001, 依藤・広瀬 2002, 依藤 2003, 降旗ら 2004, 降旗ら 2006, 岡田ら2008）が示唆するように、子どもの頃との関連を検討することには意義があると考えられる。

これらの研究は、子どもの頃の家庭環境に注目したもの（田尻・井村 1994, 依藤・広瀬 2002, 依藤 2003）と子どもの頃の自然体験に注目したもの（Tanner 1980, Tanner 1998, Chawla 1998, 比屋根・畑中 2001, 降旗ら2004, 降旗ら2006, 岡田ら2008）とに大別され、様々な方法（例えば、質問紙調査, インタビュー調査, ライフヒストリー法, 等）により検討が行われている。

*¹ 吉備国際大学 (Kibi Intl. Univ.), *² くらしき作陽大学 (Kurashiki Sakuyo Univ.), *³ 岡山大学 (Okayama Univ.)

しかし、子どもの頃の家庭環境および自然体験の両方に注目して、大規模な質問紙調査を行った例は、あまりないようである。

以上の背景から、著者らは、2007年に、岡山県内の大学生797名を対象として、質問紙調査を行った。調査では、現在のライフスタイル（環境配慮行動・社会活動）を尋ねるとともに、子ども（小学生）の頃の家庭環境や自然体験についても尋ねた。

本研究では、調査結果に基づき、環境配慮行動および社会活動の状況を明らかにするとともに、それらと子どもの頃との関連について報告する。

2. 方法

2.1 質問紙調査

2007年11～12月に、岡山県内の3大学の学生を対象に、質問紙調査を行った。調査対象者の選定は、有意抽出法により行った。

質問項目は、性別・年齢、所属大学・学科、等の基本属性、家事（炊事・洗濯・掃除）を行う頻度、社会活動、性格、環境配慮行動、環境問題に関する意識、子どもの頃の家庭環境・自然体験、高校生の時の総合的な学習の時間、等多岐にわたる。

環境配慮行動については、以下の8行動について、調査時における実施状況を「全くしない」、「めったにしない」、「ときどきする」、「いつもする」という選択肢で尋ねた。

- マイバック持参
- 牛乳パック・トレー等のリサイクル
- 使用済みの紙の再利用
- 待機電力節約
- 冷暖房設定温度（冬20℃以下、夏28℃以上）
- 環境に優しい商品の購入
- 無農薬農作物の購入
- 地元産農作物の購入

社会活動については、以下の6活動について、最近2年間の活動状況（大学の授業等での参加は除く）

を、「0回」、「1回」、「2回」、「3回以上」という選択肢で尋ねた。

- 行政、民間が開催している講座・講演会
- 町内会活動・集会
- スポーツイベント・大会
- ボランティア活動
- 大学や短大などで開催されている公開講座・講演会
- 市民団体での活動

子どもの頃の家庭環境・自然体験については、依藤・広瀬（2002）、依藤（2003）、降旗ら（2006）の研究を参考にして、以下の12項目について尋ねた。なお、これらの中には、例えば、「キャンプに行ったか」のように、子どもの頃の家庭環境および自然体験のいずれとも関係があると考えられる質問も含まれている。各質問の選択肢については、後掲の表（表3～5）を掲載されたい。

- 家の周りの自然で遊んだか
- 動物や虫類を飼っていたか
- 自分の家に田んぼや畑があったか
- 田んぼや畑で作業をしたか
- キャンプに行ったか
- 理科の実験・観察は好きだったか
- 地域のクラブに入っていたか
- 家庭で節分・彼岸・節句などの季節の行事はあったか
- 海外に住んでいたか
- 祖父母と同居していたか
- 家族団らんの時間はどのくらいあったか
- 家族に物を粗末にして「もったいない」と言われたことがどのくらいあったか

2.2 分析方法

環境配慮行動および社会活動に関する回答を単純集計するとともに、実践度が高いと考えられる者の

比率と子どもの頃との関連を、ロジスティック回帰分析²により調べた。なお、オッズ比の算出に用いる基準は、各説明変数において、実践度が高いと考えられる者の比率が最も低いカテゴリとした。分析の詳細は、3節で詳しく述べる。

なお、環境配慮行動（8行動）の中には、炊事を日常的に行っていない者にとっては、回答が困難であるものも含まれていると考えられる。そこで、環境配慮行動に関する分析では、炊事を「めったにしない」と回答した者は除外して分析を行った。

すべての統計解析は、SPSS 15.0 Jを使用して行った。

3. 結果

3.1 回収結果

調査の結果、797名から回答を得た。回答者の属性を表1に示す。回答者には、社会学、社会福祉学、理学、工学、保健、家政、芸術、環境、等、様々な分野の学科に所属する者が含まれていた。

表1 回答者の属性

	性別		学年				合計
	男性	女性	1年	2年	3年	4年	
A 大学	244(64.0)	137(36.0)	74(19.4)	142(37.3)	155(40.7)	10(2.6)	381(100.0)
B 大学	177(76.6)	54(23.4)	30(13.0)	105(45.5)	70(30.3)	26(11.3)	231(100.0)
C 大学	44(23.8)	141(76.2)	82(44.3)	21(11.4)	62(33.5)	20(10.8)	185(100.0)
合計	465(58.3)	332(41.7)	186(23.3)	268(33.6)	287(36.0)	56(7.0)	797(100.0)

数値は度数および比率 (%) を示す。

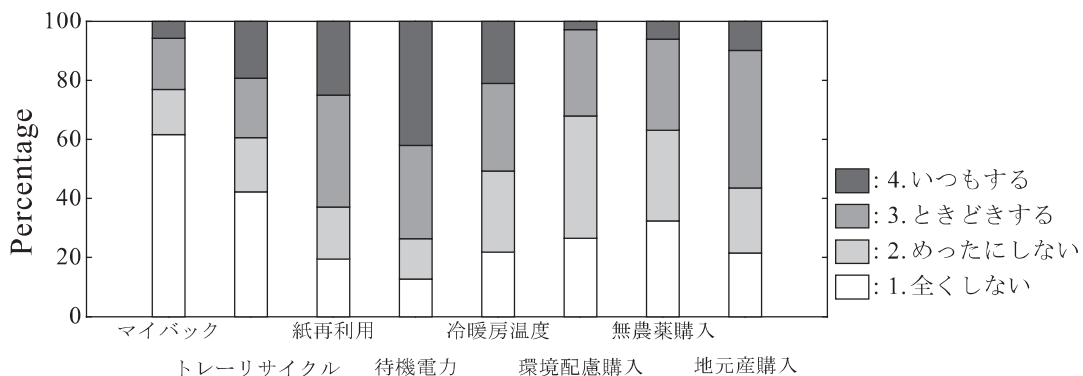


図1 環境配慮行動に関する回答結果

環境配慮行動に関する分析の対象者（炊事を「ときどきする」あるいは「いつもする」と回答した者）は、584名であった。

3.2 環境配慮行動の実施状況

図1に、環境配慮行動に関する回答結果を示す。肯定的な回答（「ときどきする」あるいは「いつもする」）をした者の比率に注目すると、例えば、「マイバック持参」では約23%、「牛乳パック・トレー等のリサイクル」では約39%、「地元産農作物の購入」では約56%であり、環境配慮行動の種類によって、行動の実践度には、差がみられた。

3.3 社会活動の実施状況

図2に、社会活動に関する回答結果を示す。最近2年間に1回以上参加した者の比率に注目すると、「スポーツイベント・大会」、「ボランティア活動」、「大学や短大などで開催されている公開講座・講演会」では、それぞれ、約48%、約41%、約45%、であ

った。これらの活動の実施状況は、「行政、民間が開催している講座・講演会」、「町内会活動・集会」、「市民団体での活動」（同じく、それぞれ、約26%、約17%、約10%）よりも高かった。

3.4 環境配慮行動および社会活動に関する主成分分析

環境配慮行動および社会活動と子どもの頃との関連を分析するにあたり、主成分分析を用いて、環境配慮行動および社会活動の実践に関して得られた情報を集約することを試みた。

環境配慮行動（8行動）に関する回答に基づいて、主成分分析を行った。その結果を表2に示す。分析では、固有値が1以上であった第2主成分までを採用した。第1主成分は、グリーンコンシューマとしての行動（以下、グリコン行動）の実践度を表して

おり、第2主成分は、ごみ問題およびエネルギー問題に関わる行動（以下、ごみ・エネ行動）の実践度を表していると解釈された。

社会活動（6活動）についても、同様の方法で主成分分析を行ったが、1つの主成分のみが抽出される結果となった。

3.5 環境配慮行動と子どもの頃との関連

3.4節（表2）で述べたグリコン行動（3行動）、および、ごみ・エネ行動（5行動）について、「全くしない」、「めったにしない」、「ときどきする」、「いつもする」の各選択肢につき、0、0、1、2点を与え、合計点を算出し、その得点（グリコン行動：0～6点、ごみ・エネ行動：0～10点）を利用して実施状況を評価した³。

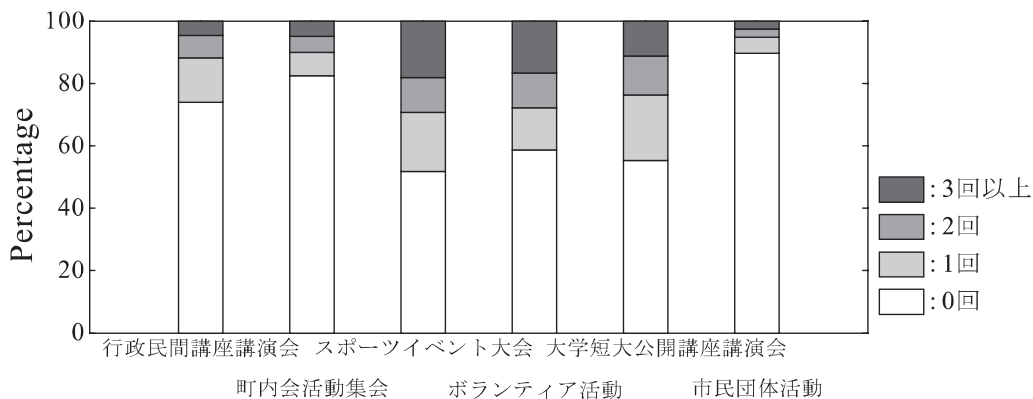


図2 社会活動に関する回答結果

表2 環境配慮行動に関する主成分分析の結果（因子負荷量）

環境配慮行動\主成分	1	2
マイバック持参	0.140	<u>0.591</u>
牛乳パック・トレー等のリサイクル	0.251	<u>0.634</u>
使用済みの紙の再利用	0.211	<u>0.646</u>
待機電力節約	-0.033	<u>0.628</u>
冷暖房設定温度	0.193	<u>0.576</u>
環境に優しい商品の購入	<u>0.677</u>	0.212
無農薬農作物の購入	<u>0.842</u>	0.120
地元産農作物の購入	<u>0.822</u>	0.166
固有値	2.01	1.98
寄与率 (%)	25.1	24.8

本研究では、グリコン行動については、得点が3点以上であった者を、ごみ・エネ行動については、得点が5点以上であった者を、“実践度が高い者”とみなして⁴、その比率と子どもの頃との関連を、ロジスティック回帰分析により検討した。

最初に、子どもの頃に関する各質問項目との関連を、性別の影響を調整したロジスティック回帰分析により検討し、 $p < 0.10$ であった項目をリストアップした。次に、リストアップされた項目と性別を説明変数として、変数減少法（ステップワイズ法）によるロジスティック回帰分析を行った。各ロジスティックモデルの妥当性を、Hosmer-Lemeshowの適合度検定により確認した。なお、以降の分析では、分析に用いる変数に無回答がみられた回答については除いて分析しているため、分析によってサンプル数

(N) が若干異なる。

表3に、グリコン行動に関する結果を示す。

グリコン行動については、「キャンプに行ったか（以下、キャンプ）」、「理科の実験・観察は好きだったか（以下、理科実験・観察）」、「家庭で節分・彼岸・節句などの季節の行事はあったか（以下、家庭季節行事）」との間に、有意な関連が認められた。

「キャンプ」については、「よく行った」と回答した者のオッズ比は、「ほとんど行かなかった」と回答した者を基準とした場合、2.36であり有意に高い値を示していた。このことは、子どもの頃にキャンプによく行った者には、グリコン行動の実践度が高いと考えられる者が多いことを意味する。参考のため、図3に、「キャンプ」に関する回答とグリコン行動の得点の関係を示す。

表3 グリーンコンシューマとしての行動（グリコン行動）と子どもの頃との関係（ $N = 578$ ）

要因	カテゴリ	N	オッズ比	95%信頼区間	p 値
キャンプに行ったか	よく行った	117	2.36	1.35-4.13	0.003
	ときどき行った	260	1.51	0.92-2.47	0.101
	ほとんど行かなかった	201	1		
理科の実験・観察は好きだったか	好きだった	353	1.72	1.06-2.79	0.027
	どちらともいえない	172	1		
	嫌いだった	53	1.10	0.45-2.67	0.834
家庭で節分・彼岸・節句などの季節の行事はあったか	あった	347	2.79	1.67-4.64	<0.001
	ときどきあった	183	1		
	ほとんどなかった	48	1.77	0.72-4.35	0.212

Hosmer-Lemeshow の適合度検定 ($p = 0.584$)

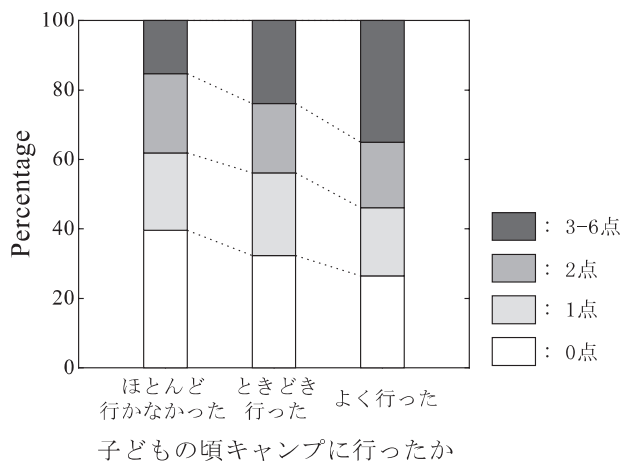


図3 「キャンプ」に関する回答とグリコン行動の得点の関係

「理科実験・観察」については、「好きだった」と回答した者のオッズ比は、「どちらともいえない」と回答した者を基準とした場合、1.72であり有意に高い値を示していた。「嫌いだった」と回答した者のオッズ比は1.10であり、「どちらともいえない」と回答した者と同程度の値を示していた。以上のことは、子どもの頃に理科の実験や観察が好きだった者には、グリコン行動の実践度が高いと考えられる者が多いことを意味する。

「家庭季節行事」については、「あった」と回答した者のオッズ比は、「ときどきあった」と回答した者を基準とした場合、2.79であり有意に高い値を示していた。このことは、子どもの頃に、家庭で節分・彼岸・節句などの季節の行事が頻繁にあった者には、グリコン行動の実践度が高いと考えられる者が多いことを意味する。

表4に、ごみ・エネ行動に関する結果を、表3と同様の方法で示す。

ごみ・エネ行動については、性別、「理科実験・観察」、「家族に物を粗末にして『もったいない』と言われたことがどのくらいあったか（以下、もったいないと言われた経験）」との間に、有意な関連が認められた。

性別については、女性のオッズ比は、男性を基準とした場合、2.32であり、有意に高い値を示していた。このことは、女性には、男性よりも、ごみ・エネ行動の実践度が高いと考えられる者が多いことを意味する。

「理科実験・観察」については、「嫌いだった」と回答した者のオッズ比が1.85 ($p = 0.073$)であり、有意とは判定されなかったが、比較的高い値を示していた。すなわち、グリコン行動の場合（表3）とは異なり、「理科実験・観察」に関する回答と実践度との間に、正の関連は認められなかった。

「もったいないと言われた経験」については、「ときどきあった」と回答した者を基準とした場合、「まったくなかった」および「毎日のようにあった」と回答した者のオッズ比が、それぞれ3.13、1.96であり有意に高い値を示していた。このことは、子どもの頃に、「もったいない」と言われた経験が、極端に少ない者、あるいは、極端に多い者には、大学生になってからの、ごみ・エネ行動の実践度が高いと考えられる者が多いことを意味する。

3.6 社会活動と子どもの頃との関連

社会活動（6活動）について、「0回」、「1回」、

表4 ごみ問題およびエネルギー問題に関わる行動（ごみ・エネ行動）と子どもの頃との関係（ $N = 574$ ）

要因	カテゴリ	N	オッズ比	95%信頼区間	p 値
性別	男性	301	1		
	女性	273	2.32	1.61–3.35	<0.001
理科の実験・観察は好きだったか	好きだった	347	1.54	1.01–2.35	0.043
	どちらともいえない	174	1		
	嫌いだった	53	1.85	0.95–3.61	0.073
地域のクラブに入っていたか	入っていた	65	1.64	0.95–2.84	0.079
	入っていなかった	509	1		
「もったいない」と言われたことがどのくらいあったか	まったくなかった	28	3.13	1.38–7.11	0.006
	ときどきあった	247	1		
	よくあった	237	1.44	0.96–2.15	0.076
	毎日のようにあった	62	1.96	1.08–3.57	0.028

Hosmer-Lemeshow の適合度検定 ($p = 0.726$)

「2回」, 「3回以上」の各選択肢につき, 0, 1, 1, 1点を与え, 合計点を算出し, その得点(0~6点)を利用して活動状況を評価した。

本研究では, 社会活動の得点が3点以上であった者を, “実践度が高い者”とみなして⁵⁾, その比率と子どもの頃との関連を, 表3および表4と同様の方法によるロジスティック回帰分析により検討した。

社会活動に関する分析結果を表5に示す。

「自分の家に田んぼや畑があったか(以下, 自宅・田畑)」および「キャンプ」との間に, 有意な関連が認められた。

「自宅・田畑」については, 「あった」と回答した者のオッズ比は, 「なかった」と回答した者を基準とした場合, 1.55であり有意に高い値を示していた。このことは, 子どもの頃に, 自分の家に田んぼや畑があった者には, 社会活動の実践度が高いと考えられる者が多いことを意味する。

「キャンプ」については, グリコン行動の場合(表3)とほぼ同様の結果であり, 子どもの頃にキャンプによく行った者には, 社会活動の実践度の高い者が多いと考えられた。

3.7 環境配慮行動と社会活動との関連

表6に, 環境配慮行動および社会活動の得点間の相関について, Spearmanの順位相関行列を示す。

ごみ・エネ行動およびグリコン行動と社会活動の相関は, いずれも約0.1であり, 環境配慮行動と社会活動の実践度との間には, 強い関連は認められなかった。

4. 考 察

本研究の結果, 大学生の環境配慮行動および社会活動の実践と子どもの頃の家庭環境・自然体験との間には, 有意な関連が認められた。

1節で述べたように, 従来の研究においても, 子どもの頃との関連を示唆する結果が得られている。以下では, それらの研究成果を概観するとともに考察を行う。

家庭環境については, 主として, 親の影響に注目した量的研究が行われている。

例えば, 田尻・井村(1994)は, 幼稚園および保育園に在園する3歳以上の幼児について, その母親を対象とした質問紙調査を行っている。得られた302票の回答を分析した結果, 母親の環境保全行動および社会への参加意欲は, 子どもの自然に対する感性

表5 社会活動と子どもの頃の関係 (N=733)

要 因	カテゴリー	N	オッズ比	95%信頼区間	p 値
自分の家に田んぼや畑があったか	あった	433	1.55	1.11-2.16	0.010
	なかった	300	1		
キャンプに行ったか	よく行った	138	2.61	1.67-4.07	<0.001
	ときどき行った	323	1.72	1.19-2.50	0.004
	ほとんど行かなかった	272	1		

Hosmer-Lemeshow の適合度検定 ($p = 0.655$)

表6 環境配慮行動および社会活動の得点間の順位相関行列

	グリコン行動	社会活動
ごみ・エネ行動	0.336	0.102
グリコン行動		0.110

の形成に好ましい影響を及ぼすことが示唆されている。

また、依藤（2003）は、小学校4～6年生の児童とその保護者276組に対して質問紙調査を実施している。なお、この調査では、親用と子ども用の質問紙が用意されており、両者は相談せずに回答するよう指示が与えられている。その結果、親のごみ減量行動を観察することが、子どものごみ減量行動に強い影響を及ぼすことが示されている。すなわち、親が子どもに話題を提供したり、注意をしたり、ほめたりするよりも、親自身が行動で示すことが、子どものごみ減量行動の促進に対して効果的であることが述べられている。

一方で、自然体験については、欧米の環境教育研究で注目されているSignificant Life Experiences (SLE) (Tanner 1980, Chawla 1998, Tanner 1998) に注目した質的研究が多い。

例えば、降旗ら（2006）は、SLEに関するワークショップ調査およびインタビュー調査を行っている。その結果、環境的行動を実践する人々は、その人格形成過程における特定の体験（SLE）の影響を受けており、その多くは、野外で家族や少人数の友人と過ごすこと、学校や団体での自然体験活動など、いずれも自然体験に関係するものであったことが報告されている。

比屋根・畑中（2001）は、森林や林業に対して何らかの行動を起こしている者12名を対象に、ライフヒストリー法に基づいた調査を行っており、過去の生活体験の特徴と行動を起こすきっかけについて検討している。その結果、森林活動家は、子どもの頃に直接的な強い森林体験を有していること、多くの場合、森林体験には両親や家族が関わっていること、などが報告されている。

岡田ら（2008）は、量的研究・質的研究（自由記述調査）の両面から、少年期の組織キャンプにおけるSLEが、成人期の環境行動に及ぼす影響を示して

いる。なお、この研究では、家庭環境が環境行動に及ぼす影響については、調査されていないようである。

本研究では、自分自身の子どもの頃を振り返りながら回答する方法を採用しており、子どもと親を同時に調査した依藤（2003）の方法とは研究方法が異なる。また、降旗ら（2006）が、主として質的な研究を行っているのに対し、本研究では、質問紙調査の結果に基づき、量的な分析を行っている。このように、従来の研究とは異なる方法で研究を行った結果からも、子どもの頃の家庭環境や自然体験が、環境配慮行動や社会活動の実践に、直接的・間接的な影響を及ぼしていることが示唆された。

なお、本研究の回答者には、3大学において、様々な分野の学科に所属している者が含まれている。当然のことながら、所属大学や所属学科は、回答者の意識・行動と強く関連していると予想される。そのため、所属大学の影響を調整した分析についても念のため行ったが、3節で述べた子どもの頃との関連に、顕著な変化は認められず、ほぼ同様の結果が得られている。

最後に、本研究の限界について述べる。本調査は、有意抽出法により行われたものである。そのため、以上述べた傾向の一般性については確認が不十分である。しかし、著者らが、2006年度に、20歳以上の岡山市民2,000名を、住民基本台帳から無作為に抽出して行った調査の結果においても、ほぼ同様の結果が得られていることを申し添えておく（宮川ら2008）。

5. おわりに

本研究の最終的な目標は、子どもの頃の環境教育のあり方を考えるための基礎的資料とすることである。しかし、例えば、図3からも明らかなおおり、環境配慮行動や社会活動の実践と子どもの頃との関連は、それほど強いものではない。このことは、子

どもの頃の経験が成人後の行動に対して直接的・間接的に及ぼす影響には、個人差があることを示唆している。

環境教育のあり方を考えるための基礎的資料とするためには、上述の個人差を生じさせる要因について検討する必要がある。すなわち、子どもの頃の家庭環境や自然体験が、環境配慮行動や社会活動の促進要因となりうるケースを、従来の研究よりも具体的に明らかにする必要があり、これについては今後の課題である。

今後は、本質問紙調査および岡山市民を対象に行った質問紙調査（宮川ら 2008）の結果に基づき、個人差の要因として回答者の性格等に注目した追加分析を行う予定である。また、インタビュー調査などの質的研究についても行う必要があると考えられる。

謝 辞

本研究は、財団法人八雲環境科学振興財団の平成19年度環境研究助成により、実施できたものである。また、平成20年度に行った追加分析については、平成20年度吉備国際大学学内共同研究費ならびに科研費若手研究B（研究課題番号：19700620）の助成により行われたものである。ここに記して、深く感謝の意を表す。

【注と参考文献】

1. これらの行動の実践が、持続可能な社会の実現にどの程度寄与するのかについては議論の余地がある。また、これらの行動を実践することのみが持続可能な社会の実現に貢献するための方法ではないことを、念のため申し添えておく。
2. 多変量回帰分析の一手法である。ある事象が起こる確率を、複数の要因から予測するための回帰式（ロジスティックモデル）を導出することができる。目的変数は2値データ、説明変数はカテゴリ変数や連続変数を、複数用いることができる。この分析方法は、適用の際の仮定

や制限が少なく、得られる結果の信頼性も高いといわれている。

各要因の関連（影響）の程度は、オッズ比で評価することができる。オッズ比は、目的変数と説明変数の関係の強さを表しており、0～∞の値をとる。オッズ比が1の場合、2つの事象に関連はないことを意味する。同様に、1より大きい場合には正の関連、1より小さい場合には負の関連があることを意味する。

3. 通常ならば、グリコン行動およびごみ・エネ行動の実践度の評価には、主成分得点を利用するところであるが、3.6節で述べる社会活動に関する結果（社会活動については、固有値が1以上の主成分は1つのみであったため、主成分分析を行う必要がないと考えられた）との対応を考慮して、このような得点を算出して評価することにした。

なお、グリコン行動の得点と第1主成分得点との間のSpearman順位相関係数は0.912、ごみ・エネ行動の得点と第2主成分得点との間のSpearman順位相関係数は0.936であり、当然のことながら非常に高い値を示していた。

4. 当然のことながら、二値化する際のしきい値の位置によって、結果が影響を受ける可能性も考えられるが、グリコン行動については、4点以上・未満、ごみ・エネ行動については、6点以上・未満で二値化した分析においても、本研究とほぼ同様の結果が得られている。
5. 当然のことながら、二値化する際のしきい値の位置によって、結果が影響を受ける可能性も考えられるが、2点以上・未満で二値化した分析においても、本研究とほぼ同様の結果が得られている。

Chawla L, 1998, Significant Life Experiences Revisited: a review research on sources of environmental sensitivity, *Environmental Education Research*, 4(4), 369-382.

降旗信一, 畠山芽生, 櫃本真美代, 伊東静一, 石坂孝喜, 又井裕子, 2004, Significant Life Experiencesの成立と発展, *環境教育・青少年教育研究*, 3, 13-24.

- 降旗信一, 石坂孝喜, 畠山芽生, 櫃本真美代, 伊東静一, 2006, Significant Life Experiences (SLE) 調査の可能性と課題, 環境教育, 15 (2), 2-13.
- 比屋根哲, 畑中勝也, 2001, 森林活動家の生活体験に関する分析事例—森林教育研究へのライフヒストリー法の応用, 林業経済研究, 47(2), 24-31.
- 宮川雅充, 井勝久喜, 諸岡浩子, 土生真弘, 青山勲, 2008, 環境配慮行動および社会活動の状況とそれらの関連要因—子どもの頃の家族交流・自然体験に注目して—, 日本環境教育学会第19回大会(東京)研究発表要旨集, 215.
- NPO法人 持続可能な開発のための10年推進会議編, 2006.12, わかる!ESDテキストブック シリーズ1基本編, 未来をつくる『人』を育てよう.
- 岡田成弘, 岡村泰斗, 飯田稔, 降旗信一, 2008, 少年期の組織キャンプにおけるSignificant Life Experiencesが成人期の環境行動に及ぼす影響, 日本環境教育学会第19回大会(東京)研究発表要旨集, 212.
- 田尻由美子, 井村秀文, 1994, 幼児の環境意識・態度形成に影響を及ぼす母親の生活行動に関する調査研究, 環境教育, 4 (1), 8-18.
- Tanner T, 1980, Significant Life Experiences: A new research area in environmental education, Journal of Environmental Education, 11(4), 20-24.
- Tanner T, 1998, On the origins of SLE research, questions, outstanding, and other research traditions, Environmental Education Research, 4(4), 419-423.
- 依藤佳世, 広瀬幸雄, 2002, 子どものごみ減量行動を規定する要因について, 環境教育, 12 (1), 26-36.
- 依藤佳世, 2003, 子どものごみ減量行動に及ぼす親の社会的影響, 廃棄物学会誌, 14 (3), 166-175.

Abstract

A questionnaire study was carried out to examine the status of environmentally conscious behavior and social activity among university students and to investigate the relationship between environmentally conscious behavior, social activity, and childhood conditions (childhood was defined as the period during which they were elementary school students). A total of 797 undergraduate students studying in three universities in Okayama Prefecture answered the questionnaire. The questionnaire included questions on (1) environmentally conscious behavior (8 items), (2) social activities (6 items), and (3) childhood conditions (i.e., domestic environment and experiences in nature). Environmentally conscious behavior and social activities of university students were found to significantly and positively correlate with their childhood conditions.

Key words : Environmentally Conscious Behavior, Social Activity, Childhood Conditions, Domestic Environment, Experiences in Nature, Environmental Education